

的順應の事實を以て吾人の前に横はる。オスカル、ヘルツァグの如き卓出せる生物學の大家が、進歩の原則てふ名詞を、全體としての自然の發達に適用することの、科學的に眞理なることを主張す。彼は曰く「發達の進歩の原則の最も顯著なる實例は卵よりせる一切の有機的啓發（個體的發達）の中に發見せらる。蓋は其の各自階級は次後階級の準備にして、其の過程は外部の條件の存する限、斷へず之を充實する方向に行進するが故なり。外面の輕微なる妨害すらも、此の妨害を壓仆し、之に匹敵する種様の手段内に存するあるが故に、過程の進行を禁遏すること能はず。是故に發達の行程は、斷へず其の性質に由りて預指せられたる目的に返りて、其の命定せられたる目的に壓進す」と。是故にヘルツァグは同様に亦一般の自然的、歴史的進化の法方を恒久的、秩序的進歩として考察し、偶然の遊戯に非ずして、卵の有機的啓發の如く同一

内面的必要を有せる物として考察したり。（細胞及び其組織二百七十八頁）之と均く米國の大家教授セルソンも卵の發達に於て觀察せらるべき所の種々なる劈開の形狀を語るに當りて曰ふらく「吾人は此等の劈開の諸形狀を、究竟結果に對する言及なしには理會する能はず」と（細胞三百七十七頁）。此の説は一切自然界を通じて適用せらる。吾人は自然的過程の一切の横截面に於て見るべき事物を究竟結果に言及する無くしては理會すること能はず。何等の時期に於ても生命は人生の大海に、方向無しに浮泛する小船の如く見ゆること無し。生命は決して懶惰者に非ず、如何に風波に漂はさるとも、生命は恒に究竟結果に向ひて運動し、奮闘しつゝあるなり。

全體としての自然の過程の此の有極的性質——其の習慣的方法即ち目的に向つて行動する所の方法——は自ら多様の方法を以て思慮あ

る観察家に印象す。吾人は同一物質が如何に頻繁に自然に由りて作  
了せられ、而して倍善の形體に作成せられしかを回顧するに當りて此  
の事實を確認す。蓋は此の地球に於ける同一の元子的物質が、不斷の  
發達を以て植物又動物生命の歴史に於て幾回となく作了せられ、自然  
の全力が之が爲に盡されたるが故なり。順應は順應に次て引入せら  
れ、形體は形體の後に淘汰せられぬ。同一の微分子は植物の模型の網  
狀の中に、原生動物の漠然たる感覺を有する單一なる細胞の中に、軟體  
動物の有機體的肉體の中に、空の鳥の温血の中に、政治家の頭腦の中に、  
聖徒の心の中に用ひられたるべし。自然は其の手中に賦與せられた  
る物質を以て其の極力を盡すべし。自然の極力は自然の最善なり。  
善を行ふに疲るゝこと無く、生命の悠長なる道に沿ふて倦むこと無く、  
目的に向つて壓迫しつゝ、自然は己を理會するものを理會すべく努力

す。自然は之に時を與ふれば其の全成の全法則を充實せん。  
完成に對する審知的行動としての此の如上の記憶すべき自然の行爲  
は、個體の生命歴史の開展を測量して、完全なる圈界に至るに當りて、單  
に進歩的順應の大體の場合に於て明かなるのみならず、更に精細なる  
場合に於ても明かなり。——例せば吾人若實は繼續せるが然し表面  
上斷絶せる階級を通過し、其の發達に於て完全なる圈界を成就せる所  
の諸の動物の、諸の生命の進路に於ける自然の過程を考へば。例せば  
吾人は絲蘭屬の蛾の趣味あり奇異なる履歷に關するモルガン氏の説  
明を擇ばんか、此の銀白の蟲は「絲蘭の黄白なる鐘狀の大なる花が、各唯  
一夜の間に發くに當りて、其の蛹函より發生す。其の蛾の女性、此等の  
花の一の葯より金粉を聚て之を小球に捏る。彼女は慎重に之を負ひ、  
之を保ち、飛んで又他の花を求む。他の花を發見すれば、女蛾其の放卵

管の刃針を以て、雌蕊の組織を貫き、胚珠の中に其の卵を放下し、次て呼吸孔の頂に飛んで、其の漏斗状の口に金粉の受胎せる小珠を詰めこむ。蛾の訪問は此の花に必要ななり、然らざれば此の花は受胎せずして存すべし。花の胚珠の受胎は、亦蛾の幼蟲に必要ななり。蓋は此等幼蟲は唯發達せる胚珠をのみ食すればなり。「蟻螞各約二十の胚珠を盡す」而して其の子房が「約二百の胚珠を包有する」同時に「其の子房に三頭四頭の蟻螞あり」(ロイドモルガン)習慣と本能「十四頁」是故に兩者各相倚りて兩立す。植物は蛾の爲に其の種の一部を犠し、蛾は絲蘭花に其の受胎の手段を與ふ。蛾は一切此の奇異なる順應を其の生涯に唯一回遂行す。彼女は嘗て其の子孫を見ることなく知ることなし。彼女は其の卵の上に又此の植物の上に、己が行ひし所の結果を理會するの手段を有すること無し。尙且彼女は此の嘉すべき目的の爲に勞め、自然は此

の目的の爲に其の勢力を祝福す。茲に在つて活動と順應の奇異なる結果は確實にして、自然は此の完全なる連續に由りて一定の目的に行動す。自然は植物生活の原素と動物生活の活動との此の結合に由りて、兩者の利益を確定す。結果を求むる多數の原動力の調和、是に於て見るべし。然して此等の結果自身も亦生命の完成的行動又過程の部分なりとす。此の實例に於て——多數同様の實例をも又與ふるを得——人は全く關係を看失ひ、自個完成を行ふ所の生命歴史を追跡することを誤るべし、若自然の完全なる連續が觀察せらるゝある無くんば。是は自然が如何に多數なる方法に於て自己を成就するかと云ふことを證る實例なりとす。吾が人類に先する一個完全なる生命歴史を以て、吾人は一大暗示的意義の眞理を認識するを得——生命歴史の定限されたる一時期のみに就て各別に考ふる時は、奇怪に難解に見ゆる所

の事物も、自他相互の關係に於て之を見、一個秩序井然たる過程の數時期として之を見るに當りては、一個嘉すべき全體として解説せられ、一切之に歸入し畢る。絲蘭蛾の各自の活動と本能、並に絲蘭花の各自の按排、是れ皆自然の完成に向へる一切流行的傾向の特徴なりとす。之に由りて吾人は自然が隨處に其の端緒を啓きし所を、必ず完成すべきことを確保するを得。汝若母たる自然が一瞬間に於て行へる所を理會せざらん乎、悠長に之に注意せよ、然らば必ず知る所あらん。

此の進歩的發達の一般の事實は、吾人が一倍縝密に之に注目するとき、は二個の明白なる状態を開示す。其の形體と機關の兩者の進歩的發達なるとなり。生命は其の向上するに隨ひて倍善の形體を取る。之に由りて其の職分を倍善に遂行す。別言すれば生命は倍善なる行動を爲さんが爲に、倍善の形體を帶ぶることなり。是の二者即ち形體と

職分は自然界に於て同伴せり。二者相互に他の發達を助くべく見ゆ。例せば魚の游泳的氣胞は發達して肺を成す、肺は其の成就するや空氣を呼吸するの職分を倍善に遂行す。兩者何れが先だてる乎、——機關先備はつて使用を喚起したる乎、使用機關を喚起したる乎、——と云ふ、是は久しき生物學上の問題なりとす。時ありては形體先づ具備して或る將來の使用を豫期せるやう見ゆ。然れども構造の改善と倍善なる順應に適するの機關を要求するに由りて、生命が全備に向上することは確實なり。ワード氏の説巧に進化の此の特性を命言せり、曰く「進化は唯活くるを求むるのみならず、好く活くることを求む」。

機關的職分に對する進歩的形體と倍善の順應との此の相賴的發達の事實は、粗漏なる進化の見解に由りても明かなり。進歩の此の二重方法の或る事物は、無機的性質を特表せり。天文學は星の構造に於ける、

繼續的段階を標識せり。空の後世の進化に於て二個の特別にして而も關係せる構造の方法が識別せられぬ、一は多少火雲的物質なる一個の輪の發達にして、他は比較的に平等なる形體に分る、星系的物質の分離なり(千八百九十七年十二月)通俗科學的月報五十二卷百七十五頁——百七十六頁)然れども然く星系的形體の既に取得せられしとき、星辰は一倍使用に適する物となれり。熱熾にして、發達の猶淺き星は、地球に於て現存せる如き生命を保存すること能はず。一倍發達したる世界の生命の住居として適當なる物となれり。吾人は少くとも一世界の、其の表面上其の澗谷の上、四千尺の間、生命的價值を有する或物を保存し、營養し、生命に對する自個の用を盡さんが爲、一切の星辰より來る諸の勢力を自個に吸引し得るあるを知る。星辰界の形體は、少くとも此地球てふ一點に於て有生的生存を維持する所の職業を遂行す

るに恰當するに至れり。吾人は此等の諸天が、人類以外の他の審知者の爲、如何なる職掌を盡さんが爲に、他の發光點として發達したる乎を知らず。吾人は世々の無機體の進化が、如何に此の地球を装ひて生命の花園たらしめたるかを知る。今此の生命的有用の爲に備へられたる星系的構造が、進歩的順應的なりしことを特に觀察せよ。是は瓦解する形體の繼續に非ずして、關係的形體の連續を一貫せる一好の運動なりき。巨大なる諸天は繪畫を展開せる劇場の如くならず、演劇の進化する劇場の如し。無機國の歴史は、忽ち起りて忽ち伏し恒に動きて些も進まざる波濤の繼續の如くならず。その既得せる一步が、同一方向に於ける次歩の出立點となるに當つては、寧ろ増加する運歩の數の如し。此の星の進化が如何に機械的に興起せられ、數學的に理會せらるべく自證せるにもせよ、其の根本的、常恒的性質に於ては、一個の意味と

價值とを有す。——星の進化は使用に對する構造なり、生命に服事するを目的とする所の運動なり。此の如き進化は其の結果として自個以上の高價を有する或物を取得する所の進化なり。進化は其の生命に對する功用に由りて其の目的を達す。其の目的は星辰構造に於ける、一切天文時代を値する所の目的なり。

諸天が近世天文學者に示す所の如上の記憶すべき性質、倍高の使用を目的する進歩的運動と順應の性質——服事の爲に準備したる形體——は、亦吾人の爲に造られたる所の此の世界の地質學の歴史に由りて追跡するを得。地質學者教授セイラーは此の地球の歴史に由りて、吾人の爲に此の狀景を最も巧に説明せり、曰く「吾人は亦上代よりせる此の地球の最大事業は、此の生命が恰も劇場に於てする如く、其の役割を演ずべきの場所を與ふることなりしことを見ざるべからず。吾人は吾

人の想像力も之れに想到し及ばざるほどの悠久なる歲月の間、何等の震動も、動物又植物の前進發達の行程を妨害すること無きまでに、然るで巧妙に此の地球が按排せられたりと云ふ事實に於て、地球は完全なりと云ふ最も驚異すべき證據を發見す。地皮の下十里降下すれば、茲には熱度の高きこと、何等の生命も之に勝ふる能はざる程なり。地皮以上十里上昇すれば、其の寒冷なること、地球一たび之に觸れなば、殆ど一切の創造物は即時に死滅すべし。尙且數代の間其の平均は維持せられ、地球の温度は其の現存せる温度に近く相續せられたること、此等感覺的生物が死すること無く、返りて代々繁榮するを見るが如し」と。

（地質學第一書百四十七頁）

完成を求むる進化の把持的行動は、機關の形體が由つて以て睿知を受容して之に服役する爲に準備せられたる所の發達の行程の大體觀を

行ふに當つて愈明かなりとす。進化の表面に於て、其の行程の表面の概観に由りて、自然の問題は始より如何して心の住居となりて之に服事する爲に、最も精妙なる生命の形體が顯現すべき乎と云ふことに在りしことは明かなり。其の濶大なる構造的劃線は、此の方向を指摘せり。其の反覆更新せる企圖は、一切此の方向に在り。動物界の繼續的典型は、腦と腦の職掌に對して倍加的順應を證明せり。軟體動物は既に造られ、然して夙に進化過程背後に残されたり、蓋は重厚なる殻を以て有機體を保護するが爲に、腦を造るべき何等の進歩も茲に之無ければなり。蠕蟲は再三腦を作ることを試み、筋肉を横軸的に、又經線的に布置したり。次に一倍運轉の能力を得て、或る感官の端緒を得たる時、又生命が頭と足とを得たる關節動物として、蠕蟲よりも高等に登りしとき、環蟲類と關節動物の中に幾分か腦の構造に進歩を加へたり。(教

授ブルック動物學の基礎二百十九頁) 睿知は遂に進化の主線となれり。動物學者が公平に開示して、而して其の未だ全く解答し得ざる所の疑問は是なり。動物睿知の或る分量が一たび取得されし後、其が指導的原動力として、如何なる程度まで、進化の中に竄入し、以て己の存在と勢力に由りて進化の行程を造り、之を倍高の目的に引昇ぼしたる乎。一たび進化の中に獲來れる「心」は、爾來進化の原動力となれり、心は自然淘汰を捕捉し、之を指導し、漸次に己を主宰の位地に致すときに、自然の内面よりして工夫的淘汰を施すべし。然れども此問題を通過すれば直接の論點は即ち是なり、曰く、自然は繼續的典型を貫きて、又進歩的線路の上にて、睿知の爲に準備せられたる最高度の機關即ち腦を構造して此の問題を解決したりと。「博物學者は博物學者の一人が説ける如く、人類は單純なる偶然なりしことを信すること能はず、人類は寧ろ世界が其

の一切の努力を以て不斷自ら傾向し來れる所の活物なり「教授セイラ  
同上百八十八頁」自然界に於ける完成に對する傾向の現在せりと云  
ふ事實は、吾人が「人類に對する構造的接近」と呼ぶ所の事物を、悠久なる  
歴代を一貫して追窮するに當りて、不可抗力を以て顯現し來る。是は構  
造的事件の一長鎖にして、時代は時代に聯絡して、尙且斷絶すること無  
く、其の完成に對して必要なる一環も看落さるゝこと無し。動物學者  
が何等看落されたる環あることを發見せざるは勿論なり。然れども  
彼等は其の鎖を確認する爲に、其の數環に手を觸れたり。人は此の究  
竟結果を得べき或る決定的關係と、或る不斷運動の印象を如何に言語  
に排次すべきかを知らず。此印象は科學的想像を以て、此の迅速にし  
て不斷なる機關的形體の過程と、其の無量なる時代の連續と、王國來り  
て人が統御し、生命が愛となる迄、向上する生命力の進捗とを再現すべ

き企謀に由りて成就せらる。「人の統御、是れ莊嚴なる真理、又神學にし  
て、プラウニングが其「Paracelsus」に謂ふ所なり。

「一切は人類に傾向して、

人を生せり、一切は此に至つて其の目的を遂ぐ。

然れども人既に成就するや、

神に對する傾向を更始す。

預表は人類の接近を語りき。然かく人の自覺の中にも、

彼の永劫なる範圍の内に前進する所の朦朧なる光耀に對して、

莊嚴なる預期と記號と豫表と起る。

吾人の議論は茲に次の疑問の爲に遮斷せらる。曰く、自然界に於ける  
目的の觀念、又は一切推想上の道德的趣向に類似せりと曰ふ事の外に、  
審知的目的及び心の最終の即位に對かへる此の明白なる進歩を説明



する所の何等かの進化説之あらざる乎。勿論學説の之あることは確實なり。此の學説の猶一部分に屬すれども、十分の蓋然を以て、自然の此の全過程の方法を説明するに適當なること亦勿論なり。然れば吾人をして猶一回此等の學説に返りて、其の那邊まで之を説明し得るかを檢せしめよ。此等の學説は其の道の作られたる方法を説明す。然れど生命の道を沿ひ行く自然の運動其物を説明せざるなり。彼等は自然の兵法の十分なる概括を提出して吾人に理會せしむ。然れども諸天の秩序と生命の勝利に關する創造の宏大なる韜略を包含せざるなり。眞正なる科學は、其の現今の一倍敬虔なる態度を以てすれば、彼の「適者生存の如き熟語の普通に使用せらるゝ所の冗辯的輕便に對して耐ふる能はず。彼等の此語を使用するや、恰も世界が此の語に由りて造られたるかの如き觀あり。

進歩的進化の主要なる手段は、猶一般に彼の自然淘汰と云へるダーウソンの形式によりて説述せらる。然れども此のダーウソンの形式は、創造の全部を包含せりと曰はゞ、決して確實なる物あるなし。自然は其の矢筒の中に猶他の矢を有し、其の標的を射る一方以上の方角を有せり。吾人は事實として自然が生命を進捗するに成功せる一方は、不適者を除外するに在ることを知る。自然は反覆生命を嚴酷なる試験の下に置き、不幸にして其の試験に耐へざる活物は死に遺棄せらる。或る程度まで此自然淘汰に由る進化の方法は試験の上に確證せられりと謂ふことを得。例せば千八百九十八年一月一日自然はロード島のブルピンス市に白頭翁(鳥名)の試験を行へり。其の試験は風雪なりき。氷風に屈伏したる百三十六羽が、ブラウン大學の實驗室に致され、之を蘇生せしむべき企圖行はれぬ。其の六十四羽は死滅し、七十二羽は蘇生

せり。丁寧なる観察に由りて、鳥の構造に其の生存的優勝に對する理由ありしことを發見せり。吾人が開ける如く、自然淘汰は、理想的構造に最も遠ざかれる此等諸鳥には最も破壊的なりき。其の生存したる者は、最も正規的構造に近きが爲に生存せりき。最大適者たる鳥は、其の風雪の試験を通過し、其の準備之に如かざる者は、斃れて已めり。且此の試験の反覆に由りて、優者の標準維持せらる。自然淘汰は然して完全なる生命の原則として行動す。

如上の法則が許認せられ得る者として、尙許多の疑問存す茲に他の構造的勢力の存するあらざる乎、特に其の有功なる漸化の原因は如何。研究し理會し得るものとして、漸化てふ職務は、吾人が此の自然進化の究極の性質に就て知る所よりも、更に深く吾人に開示する所あらん、吾人は生物學者をして生命の此の構造的な方法に關する複雑なる問題を

説かしめざるべからず。或る穿鑿家は進化に於ける「先ダービン原動力」と稱せられたる事物の暗示を發見す。此の問題の非常に複雑なる物なることは、一般の同意せる所なり。

ダービン以後生物學者が解釋せんと試みたる所の首要なる疑問の一は、正に暗示したるが如く、漸化の原因に關係す。漸化は、自然淘汰が劣者を剪除し、獨り優者を生長せしむる同時に、一切の方向に向つて起るべき乎。但は或る漸化が規則的に積聚したる結果を以て一定せる方向に向つて起るべき乎。若後者が事實なりとせば、而して有機體が或る一定したる有利なる生長の線路を追ふべき固有の傾向を益すべきものなりせば、進化の眞原因として自然淘汰の活動以外なる或る他の勢力を認識せざるべからず。今や又此の疑問起れり。曰く自然淘汰はダービンが假定せし如く、悠久なる時期の間、殆ど輕微にして見るべか

らざる漸化に由つて行動したる乎。又は遽然單一なる漸化が捕促せられて、新なる種を構造する手段として維持せられたる乎。(ペーリソン)「漸化研究の材料」教授コントは米國博物學者中特り輿論の歸向する所の主意を摘説して曰く「漸化が單に偶事に非ずして傾向なることは、今や最近十年間の増長發達せる確信なりとす。此は種々なる方面を研究する所の多數の生物學者の認識する所なり。此は「意識力」自個發達、「指導的傾向」<sup>デターミネーション</sup>「有極的漸化」など多様の名稱を以て稱呼せらる。然れども要するに此は或る方途に漸化を指揮する所の勢力が、自然淘汰に率先せる行動を認識したる事實なりとす。『進化の方法』三百六十四頁。古生物學者は特別に地質學上の動物の連續に關する各自の研究が力言する所の事實即ち典型の發達は、着實に既定の線路を向上すると云ふ事實を銘記せり。彼等は「明白に、一定の目的に對する不斷の進歩」を

發見せり。「動物の一群が發達の或る一線に於て發足したる後、其の線路を追ふに失錯なき正直を以てせり。更に肝要なる事物は、許多同類の群屬が、同一線を追求する所の事實是なり。(援萃論文三百六十五頁)新なる自然の研究に由りて、此の疑問を決定すべき現今生物學の事實は即ち是なり。曰く自然淘汰は、此の進歩的發達が不可抗的傾向を以て一定の線路に沿ひて前進するを説明するに十分なる乎。但は自然が目的に向つて突進する所の方途に就て、猶ほ他に學ぶ所あるべき乎。此の問題に對する答は、純粹なる生物學に超絶したる者にして、進歩的進化の最後の解釋は、宇宙の精神的方面より來らざるべからざることを發見すべきことは當然ならん。吾人若内部の發達力、若くは完成的又は進歩的原則と云へるが如き熟語に、真正なる意義を以て充たさんと欲せば、吾人若一定の目的に向ふ進歩的進化の事實に就き、單に字

義的説明以上の事物を得んとせば、吾人は早晚生物學的熟語に加ふるに、精神的意義を以てせざるべからず。進歩的進化の方途と、手段の何なるにもせよ、<sup>ポジティブ</sup>有極的漸化とは、進化の究竟説明の爲にせる審知的調和と指導とを暗示す。生物學が一切其の機構に關して愈發見すれば、愈究竟説明に便宜なり。蓋は宇宙の機械學を完全に知りたる時に、吾人は宇宙に於ける聖なる審知の必要なる位置と職分とを理會するに於て、最上の位置に立つべければなり。吾人若吾が科學の墜道を、事物を一貫して可なり悠遠に追跡するを得ば、<sup>こひねがは</sup>庶幾くは吾人の始發足したる所の其の生命の光に到達すべし。淺く考へよ、然らば汝は己の五里霧中に在ることを發見すべし。深く思へ、然らば汝は自ら聖なる日光に由り、聖なる日光に到達することを知らん。

之に相關して吾人は彼のダーキン氏と與に自然淘汰の職分を發見し

たるワレイス氏が生命の演劇に於ける首要の功力を之に歸せんと傾きながら、尙且肉體上並に精神上人類の發達に於ける或る状態あるを標識し、彼自ら是は單に自然淘汰の原則を以て説明すること能はずと告白したりと云ふ事實を注意せんとす。彼は人類の發達に於ては、自然淘汰の原則よりも一倍高等なる審知が其の行程を啓導せること、恰も吾人自身が植物、又は動物の新變種を起さんが爲に、有意に自然淘汰を指揮するが如しと暗示す。佛國のワレイス氏の批評家は彼は人類を以て神の家畜と思惟せりと罵しれり。然れども該批評家は、此の熟語に由りて其の自ら識れるよりも一倍緊要なる真理に接觸したるらし。蓋は自然淘汰は、一倍高等なる「審知」に由りて特別なる目的に啓導せらるゝらしきこと、甚だ至當と考へらるればなり。此の場合に在りては恰も特別なる攝理が、自然法を破壊すること、花師、又は鳩飼の有意

的淘汰が自然法を破壊するが如きに過ぎざるなり。此の如きは幸福なる目的の爲に自然法を利用するに足る智識を有する所の睿知が、唯特別に之を利用せるに過ぎず。然れども吾人の些も忌嫌するを要せざる所の熟語、即ち人は神の家畜なりてふ熟語に由りて暗示せられたる物は猶此以上なりとす。生命は其の高等なる形體に在つては、人若し欲せば自然淘汰に由りて次第に之を畜養し得べき能力を得るに至れりと云ふことは、前件よりも更に高く深き眞理なりとす。若此の如く生命に對して友情あり、又之を改善すべき睿知、あらは生命は或る特別なる目的に誘導せられ訓練せらるゝやう進みたる能力と、廣き漸化性を得るや必なり。萬有の神に由りて畜養せらるべき精神的、道德的能力を得たるは、其事自身既に進化の精神的所得の一たらん。自然過程全體の一般攝理的方向の基礎に於て、聖なる精力の一定行動を期

待する特別なる傾向が茲に構成せらるゝらし。若し然らば人類の思想に於ける如上の特別の啓導、其の心に於ける特別の鼓吹は、自然の行程に緣故なき事物が、自然の行程に導入したる物に非ず、寧ろ自然の行程の眞實なる祈禱の應驗として、「精神」を以て感じ啓導し向上せしむべき能力が自然に取得せられたるなり。宗教は最上の自然主義なり。特別なる攝理は然して内面の資格と、外部の精神的能力とに互に出會し進行す。若し人實際神の家畜たりとせば、古の「主」の比喻は、今猶其の勢力を失ふことなし。蓋は牧者、羊に先ちて行き、羊、牧者の聲を知らばなり。

此の點に於て、吾人は吾人の推論と生物科學との一致せることゝ、吾人の結論の或る進化哲學よりして發生したることゝを注意する爲に佇留すべし。吾人は發端より科學信條の第一條、即ち創造全體の原始的

惟一と云ふことを採用せり。吾人は人類を宇宙に屬する物として、之を其の發達の中に含まれたる物として考ふるを躊躇せず。人類の生命は其の消費したる事物如何を考量するときには、決して底價の物に非ず、否非常なる高價を有するものなり、一切の世界は彼をして靈魂を有たしむる爲に賜與せられたり。彼豈其の靈魂を以て、全世界と交換すべけん乎。然れども全體としての自然過程、及び其究竟結果に於ける吾人の解釋は、進化の中に唯運動あつて目的無く、變化あつて進歩無しと云ふ所の進化哲學と、全然其の趣意を異にす。吾人に多く進化の事實を教へたる所の日耳曼生物學者(エルローン)は、輕卒に自然界に於ける進歩の觀念と、之に伴ふ目的の觀念を棄てたり。彼曰く「進歩、完成の觀念は進歩の向つて進む所の目的を包含す。目的無ければ是の觀念は空虚なる概念に過ぎず」と。普通生理學三百十八頁眞なる哉言や。

形體の連續に由りて進歩の事實を認めて、而して目的の觀念を拒絶するは、其の過程を擧げて無意義に歸せしむる者なり。若目的の觀念を空じ去らば、自然過程の知識の全部が、可解的意義を失ふと云へるは、是れ正に吾人の位置なり。然れども教授(エルローン)は有機體發達の過程の必要を注意したる後、次の如く言を繼ぎぬ。曰く「是故に進歩又は完成の觀念の聘用は、單に人類中心の立場の證據なりとす。吾人は動もすれば發達の中に吾人自身を目的として引入せんとす。然り然れども事實は吾人自ら吾人自身を引入するに非ず、自然が發達の中に吾人自身を目的として引入するのみ。吾人は現に茲に在り。吾人は自ら説明を要するほど茲まで發達し來れるなり。吾人は今此の發達の最高點に於て己を知り、自然をも解せざる可らず。若汝森林の中を遠く通行して、終日足跡を追ひ求めたる後、一開拓地に到達し、相應なる

營舎と、晚餐と、人の一隊とを發見せば、汝は其の追跡し來りし全徑路が、薪材商賈の營舎と、其の目的たる火とを暗示せることを推測するの權利あり。自然自身其の過程の究竟結果として、吾人を人類中心の立場に進め致せり。然れどもエルラーンは言を繼ぐらく、目的は自然界に存せざる所の人造物なり。人類が變形蟲アメーバよりも完全なりと云ふことは、實際が是認せざる所なりと。吾人は吾人の生命的價値の程度に於て此の事實の是認せらるべきこと、其の等級が實際と一致することを觀す。進化は自然に人は變形蟲よりも高等なる價値を有することを假定する所の機關的生命と、其の幸福の點に迄生命を進め致せり。人類の此の主張を棄つる所の彼は、餘りに謙遜に過ぎたらすや。事實を言へば、此の哲學者は人類中心の立場より決して容易すく遁がれざるなり。蓋は彼は其の目的觀を進化より空するに當りて、己の解釋を自

然の事實の上に置ければなり。是れ彼が自然に對して提供せる所の假定なり。自然は確實に他の説明を暗示す。其の過程に關する最善の觀念は何れなり乎、吾人は世界の進歩的進化の目的に對し自然が暗示し來る觀念を拒絶するほど、未だ十分に知ること無し。之を拒絶するは淺薄なる觀念なり。蓋は若萬物の向つて動く所の目的之あらば、自然過程は少くとも其の進行し得べきほどは必ず行進すべければなり。是故に、而して他の故ならで若自然が初發よりして理想的創造たるならば、而して一切其の要素と法則が初より終まで案出されたるならば、自然は自然淘汰の一途を優勝の途、恐くは最善の途として進み、之に由りて完全に達すべし。若アルバとオメガが精神にしあらば、二者の間の行程は自然なるべし。自然的過程は精神的より精神的に向進す。是れ獨思想の程過としてのみ理解せらる。吾人若進化は明白に

目的に向ひ、倍進的傾向を以て進轉しながら、尙且目的として何等究竟結果あること無しと曰はゞ、自然に就て無用の謎を作るに過ぎず。常恒、理性無くして行進する所の自然は、理性の爲に永久不可思議物たるべし。吾人は既に理性を得たり、吾人は面を轉し背後を顧み、以て進化の理性的なるを見る。(ワード)不可思議論と自然論[第二卷二十四頁]我——人類の自個意識は人の「子」の絶対確實なる事實に於て然かく其の無上の發揮を發見す、——は何處より來り何處に往くを知る。

## 第十二章

### 未完自然の預言的價值

佛國天文學家ラブレイスは、天を以て數學的指實の連續に還元し、其の假定説に神の必要ある無しと曰へり。自然を一個機構の開展組織として視る所の人々は、恒に此の如き主張を反覆す、曰くラブレイス派の推測家は、若宇宙の或る一時期に於ける十分なる數學的智識を有せば、真正に其の將來の状態を預言するを得べしと。彼等は謂へらく、有限なる弓狀を知るに由りて、一切時の全圖を記述するを得、茲に缺けたる所は唯推測を行ふに足る全智的睿知是のみと。宇宙は然して數學的方程式として理會すべき物と想像せらる。唯必要なる物とては、僅に方程式を作製し得る睿知是のみ。

吾人は今自然的事物に關する此の如き數學的豫測は、唯宇宙が合理的



に造られたる故にのみ思料し得ると云ふこと、自然の行程は其の睿知的に構成せられたるが故に、睿知的に推算せられ得ると云ふこと、是故にラブレイスは其の天文學に於て、其の自ら思考せるよりも更に神に於ける究竟的必要を有すべしと云ふことを、進んで論ずることを欲せず。然れども吾人は此の假定説を反對の目的の爲に引く、此の假定説は、秩序あり睿知ある世界に在りて、既に知られし事物の部分と猶觀察すべき其の傾向とは、其の將來の状態、即ち倍善の成就フルクサメントに對する科學的預備なることを證するに足るべしとて、眞理を提出するの用を爲さんとする。事物の現狀は、預言的價值を有す。今在る事物よりして、將に在らんとする事物を、或る程度まで科學的に預料するを得。

是の事は有機界に於ける自然の最上秩序に就て、眞實なると疑を容れざる物なり。其の秩序は秩序なるが故に、發達の秩序なるが故に、又更

に合理的預料を許容す。人類生命の全圖の既知の要素に據りて、一倍廣汎なる推測を行ふことを得。吾人は經驗の範圍の内に追究し得る所の完成に對へる傾向を、或る程度まで預言的に現在經驗の限界以上に追究するを得。即ち吾人は其の傾向の如何なる方向に向へるかを見るを得。是故に吾人は此の完成の原則に就いて、唯是は進化の性質として何を意味するやと云ふことを考慮すべきのみならず、更に是は吾人に對して預言的に何を意味するやと云ふことを考ふるまでは、已むこと能はざるなり。

吾人の推論の現に占め得たる觀察點より眼を放たば吾人の生命に對する眺望果して如何、進化を一倍高等なる生命的價值に向はしむる進歩的運動と視、自然は一切の原動力、一切の方法の共動に由りて、同じ材料を以て、時に及んで其の全力を盡して、其の發起したる事業を完成す

るべきものと見て、吾人は最も個人的關係を有する疑問を起すことを科學的に是認せらる。——全代の過程は生命以上更に如何なる生命的結極に向つて行動するや、若此の疑問の答辯を求むるが爲に、吾人が既察の事實以上に觀望せざるべからずんば、吾人が來るべき世界時代に對して眺望するに當りて、自然界の既知の行程に沿ひて眼を放たざるべからず。

完成に向かへる自然の傾向に就き、吾人の獲取せる所の知識に據りて此の預言の原則の確實なることは、吾人か若或る過去時代即ち太古の地質的時代に其の立場を取り、其の位置よりして世界の將來の發達を預言せんと欲したりし觀察家として自個を想像せば、忽ち思半に過る物あるべし。吾人は此の位置に置かれし觀察家にして、十分なる推理的能力を有せば、其の深き預言的確信を以て、今日吾人が讀み返るやう

致へらるゝ所の發達の線路を如何に讀み進みたらんかを察知す。炭素時代は若此の如き研究的眼孔に觀察せられて、現代に發達し來りし其の前代との關係より説明せば、必ずや新天新地に對する準備の特徴を開示したらん。此の新天新地に於ての太陽は水蒸氣の拂拭せられたる大空を亘りて照り出て、乾ける地は前代よりも更に優美なる生命を孳育したらん。又既往の地質學時代に於ける睿知ある觀察家が、幼蟲的兩棲動物の鰓及び肺囊、若くは半成の聽官、未熟の眼の如き、未熟の機關を示されたりと想像せよ。此の觀察家は其の預言の基礎として此等機關歴史の前代の階段と其の現代に至れる繼續的進歩とを觀得したるべし、彼は空氣又光等の半開の外面的要素に對して其の機關が倍進的順應を得るに注意したるべし。彼は將來啓示せらるべき事物に向かへる明白なる進歩を、幾何が追ひ求めたるべし。此の歴史は未

完なれども、而も一定の發達を有せるが故に、彼は此の歴史に基きて、來らんとする倍善の事物を預言したるべし。彼は完全なる視官が終には原始の眼杯よりして完成せらるべきこと、又原始の耳の鐘狀の陥落又は昆蟲の觸角の調音又が齎す所の粗漏なる聽聆よりして、世々の行程を経て、時に及んで、音樂に應當せる所の耳が構造さるべきことを、合理的に信任したるべし。此の如き預言は發達の進みし比例に於て、肺囊が一倍明亮に生命的要素に順應し、又は耳が空氣に傳達せられたる音響に一倍應答し、眼が色彩の世界、美の世界に一倍開放するに至りし比例に於て、一倍確實となるに至らん。此の原則、確實なる自然的預言の原則は、一部發達したる機關、又待望せる周圍に適する預期的應答の必ず充實さるべき運命を有すと云ふこと、自然は其の一切完備の程度が完成さるゝに至るまでは止むこと無しと云ふことは是なり。自然が

吾人の現在の經驗以上に此の宏大なる生命的原則を率ひ至りて、其の原則を充實せんと試るに當りて、預言は正に科學的主張を有し來る。此の如き預言は、最初に既成の世界秩序の中に活機的、胚芽的に横はる事物の認識——第一には洞察にして、第二には先知なりとす、未來の時代は世界の既成の秩序の外から、通告なくして暴に入り來るべき物として視るべからず。勿論其の光榮を見れば、宗教的驚異を惹き起す物あるべし。想像を超絶したる生命の状態は、一刹那に於て來るが如く、來るものあるべし。然れども將來の實在は、吾が現在生命の主線、其の本質的、生命的價値の完成——に繼續したるものならざるべからず。故に生命の科學は、其が永久の要求と現在の秩序を建設する原則とに吾人の倍深の洞察を注ぐる限りは、吾人の爲に倍大、倍眞の豫言的異象を開くべし。是故に生物學も亦預言者の一人として見るべきものなり。

り。此の世に於ける又此の世の外なる未來の生命の待望、一切精神的、能力の十分に發達し完全に應答するに至れる曉來世の或る幸福なる周圍の中に、吾人の人格的生命を満足すべき希望——吾人の心内の此の濶大なる預言に對する信頼は、自然は其の生命の言を永久に維持する者として信頼するを得と云ふ此の眞理と、相互に織りこまれたり。自然は吾人の眼界以上に其の生命の約束を維持する物と信頼するを得、完成の原則は斷絶することなく、將其の固有の勢力は其の有機的需用の初段より、其の高騰せる熱望に由りて、來らんとする世界に於て其の完成の域に至るまでは減すること無し。

自然の完成に對向する原則は、既に吾人に先たてる生命を誤ること無しが故に、吾人をも誤ることあらじと云ふ、此の明白なる信仰を懷き、此の信仰をば科學的信任を以て、預言的價值の原則として、今吾人は之

を採用せんとす。

吾人は先此の原則よりして最も明白なる預言を作さんとす、即ち有用なる漸化は最上位置に推し進めらるべしと云ふ事なり。有用なる變種を捉へて之を利用することは、自然の既知の習慣なり。吾人は或る不利益なる漸化が、人類の生命の中より終には消滅するを期待し得、人類の生命及び歴史の潮流は、若他の道德的腐敗が妨害せられたにせば、益其自身を潔むるに至らん。生命の本然的預言者は、一切舉りて樂天家なり——究竟的樂天家なり、是れ即ち吾人の意味なり。

然のみならず設制限内に於て、又吾人の現時考へざるべからざる有限の變化に由りてするも、更に進歩したる、幸福なる生命の順應と周圍とを、科學的に待望すべき道理を有す。吾人は信じて生命的可能性の成就を勘考するを得。生ける材料を利用する所の此の過程は、生命歴史

の中に引導せられて今日に至り、而して吾人が正當に考へ得べき執持を以て、猶自然の材料を以て盡し得る限の究竟努力の盡るまでは、停止せざるべし。此等の預想は内外の原動力と要素との出會、又調和及び、此の如き一致に由れる機關的缺陷の充足を包含す。自然界の饑渴は恒に預言的なる事物を得んが爲なり、生命が要望し起す事物、其の必ず發見せざるべからざることを内より感じ起す事物は、結局外より供給せらるべし。同時に完成したる外部の條件は、内よりの満足なる應答を覺起すべし。二者茲に對會し二者遂に調合せらる。完成したる眼孔は、完全なる光線の中に開く、世々相續せる發達の進歩は、周圍及び生命の進化なり。終極の結果は兩者の調和に由る可能的最善をこそ得るべけれ。

自然向上の此の最後の絶頂に於て顯現せる者は、人類の未完の生命是なり。此の預言的價值は如何。

人は其の見るべき自然限の界の内に默示せられたる限は、進化の最高點たることを標識す。進化の衆線は一切人の上に聚注す。自然の本來的預言は人の中に約束のメシヤを發見す。——然れども人は何を意味せり乎。人は其の現在の不完全を以て、果して何を意味する乎。人の到來は舊時代の終極にして、又新時代の發端なる乎。人の地上の生命を通じて吾人は更に前方へ眺望すべき乎。若くは此以上何等の希望もあること無く、一切茲に充實せられたり乎。又人の第二の到來あるべき乎。

或る方向に於ては、自然は人の體軀的組織に於ては、殆ど終極に來りたるべきやう見ゆ。吾人は心の使用に供する爲に、人の體軀に於ける元

子的物質の順應の明に終極せることに就て、既に前に言説したる所を今更反覆するの必要を見ず。生理的進化が人に於て其の絶頂に到達したりと云ひ、唯微細の變更の猶或は殘存したらんと云ふ、是の見解に關する他の確定は、遼遠なる古代に於て、人が始て地上に顯現し來れる以來、人の體軀的能力と性質の上に、何等顯著なる變化の起らざりしと云ふ考察に由りて、提出せらる。歴史前の人類も、體軀的には現代の人と同種の物なりき。彼も亦同大の腦蓋を有せりと、是れフレイ氏の吾人に斷言する所。其の體軀的準備は、其の精神的發達の端緒に當つて完成したりき。若し人の發達が猶更に前進すべくあり、其の精神の使用の爲に、更に精巧に應當すべき、肉體、彼が爲に構成せらるべくんば、猶は一倍精氣的なる所の、生命の或る物質が、人の中に在る所の精神の使用に對して、一倍高等なる順應を行はんが爲に使用せらるゝ必要あり。

吾人は生命の爲に既に此の如き一倍精妙なる物質が、曾て人の倍善の肉體を造る爲に存することあるまじと云ふことを拒絶するに當つて、之を許證する何等の知識を有せざるなり。若此の如き物質、猶人に存せりとせば、或る自然的危機に由りて、又次後の決勝點に於て、或る倍高なる生命の秩序の顯現に由りて、一倍の向上を贏ち得ることあらん。卒然たる境遇の變化の爲に、又自然の變化の最も大なる光景を通じて人類以前に於ける繼續的發達が數次維持せられたるが如く、人類の生命の爲にも亦同じ繼續的發達が取得せらるゝこともあらん。然れども人類の發達の爲に、現在の見るべき體軀的秩序に制限あり、人若し此の制限を通過すべき爲には一倍高等なる秩序を得ん爲に生き上らざるべからず。

自然の一秩序の限極に對する説明、又其の一秩序に超絶したる條件に

生れたるが爲に之に超絶したる進歩を爲すべきことの説明は、其の接近せる領域よりして抽き來るを得。科學的穿鑿に用ふる器械の進化が、正に有益なる對照を提供す。例せば望遠鏡は縱令其の極に達せずとも、光の法則に由りて確定されたる明晰無色の定極の限度にて、今や殆ど發達し盡せり。若星の員數に於ける吾人の智識が、望遠鏡の眼力の透徹し得るより以上に研究せらるべきものとせば、吾人は周圍の或る更に高等なる能力に對して順應すべき、新しき器械を發明せざるべからず。而して天文學家は此の器械を發明したり。蓋は彼等は見るべき光線以上の虹景の中に横はる所の、化質力の光線を利用し、而して天空に對して暴露せしめたる感覺ある寫真版は、何等の望遠鏡も嘗て啓示せざる所の星以上の星の存在を開示したればなり。天の言語を讀むべき科學的機械の進化、一方に於て終極に達し、一方面に於ける可

能の限界に到達すれば、更に他方面に於て新なる機械起り、新時代の開示に由りて、舊時代の光榮は廢せらる。吾人は思ふ此の如き方法を以て、人類の超絶的進歩を想像するを得べしと。未だ見ざる所の天の榮光を開示するには、巧妙なる視神經より、一倍微妙なる物が人の智識の機關として吾人の爲に準備せられざるべからず。吾人は神を見て生くる爲に更に一層精神的に構成せられざる可らず。既に自然界に完成の原則あり、而して其が吾人に適用せらるゝが故に、其は吾人も亦大成せらるゝことを意味す。吾人は之を自然の原則として其の全體の智識を加へつゝ、信任を懷きて之に追隨し、之を吾人の生命と其の成就の爲に適用するとき、吾人は問ふ、吾が人類の進化の爲に、他の如何なる道を觀望すべき乎、吾人の内なる未完の性質が、如何にして完成せらるべき乎。吾人は今一個體軀的秩序の發達に於て、其の疑ふべからざ

る終極に達したる同時に僅に能力と愛なる所の内面的生命の發端に來れるのみ。若過程茲に停止しは、是れ甚だ不自然と謂ふべし、其の終極は如何なるべきか。

吾人がこれまで一般に考慮したる所の方向あり、此の方向の内に、人類の更に高き進化が思料し得らる。——一層有利なる人の周圍の發達なり。是故に吾人をして更に至細に此の可能性を驗せしめよ。

進化論の記者は進化が人類の時代に於て受けたる所の驚くべき變化を反覆注意したり。人類の發達は圍繞物の發達に屬すること極めて多々なり、人類の歴史は人類の境遇の改善と、其の生命の方法の向上なりき。吾人の圍繞物は、單に體軀的の事物に止まらず、其の改善は單に倍善の住居、倍良の食物、倍良の衛生的條件及び自然の要素的勢力の倍の大要求に由りてのみ成立するに非ず。亦社會的、知力的、道德的事項

によりて成立す。吾人は之に由りて口碑の堆積と呼ばれたる物を有す。小兒が今日學ぶ所の言語を見よ。

「一切既往の時代の至善の性情より、

秀逸なる意味を抜き拔きたる言語」

歴史的土壤は富贍なり。是故に吾人の圍外物の一倍の改善に由りて、吾人は人類の一層幸福なる發達を希望するを得。此の方向を瞻望して博愛家は施與し、教育家は勞苦し、政治家は建設し、社會主義者は夢想す。是故に社會的圍繞物が人類の個人的生活に最も恰當したるとき、人は謂ふ天國は地上に來れりと。然れども是は果して天に於けるが如く來りたる乎。吾人をして既に人類の生理的生命に於て、既に終極に接近したる所の進化は、人類の社會的境遇に於ける一倍幸福なる時代に進入したりと云ふことを想像せしめよ。是れ果して生命の約束



の背景の終極なるべき乎。是は以て完成に對向する生命の世々の傾向の預言書を閉づべき者なる乎。

吾人が茲に説明せざるべからざる物は、如上の社會的完成が、未來の時代に於て此の地上に來るに拘らず、完成さるべからざる發達の或る線路あること及び成就せずして殘さるべき所の生命の本質に於ける或る人類の缺陷あること是なり。

進歩的完成の科學的原則に基きて、吾人が懸命的信頼を以て、往々完成に連絡せる物として見んと希望し得る所の、此等生命の未完の線路の一は、吾人の中なる精神と、外なる原素との關係是なり。永生は其の科學的感念の中に、完全なる周圍に對する、完全なる順應を包含す。生命の完成に關する十分なる概念の成就さるゝは、唯一方に於ては實際の精神的自由を得ること——其の道德的完成に由りて、恒に平安なること

この精神的性質を得ること——に由り、他方に於ては十分に其の生存に一致したる或る周圍が、生命の爲に準備せらるゝに由るのみ。恰も空氣が其の呼吸に於て生命に應答し、光が其の視力に於て眼に應答するが如く。若吾人の内なる生命が進んで完成に達すべくんば、如上は即ち完全なる生命の科學的觀念なり。是れ人類の内なる精神と、外なる一切宇宙の神の默示的顯現と、相成す所の圓滿なる終極の調和なり。「主」の深甚微妙の一句の眞理は、曰く「永生とは神を識ることなり知り得る者となること(即ち人類)知らんとする事物が神に對する關係なること(即ち周圍)是れ圓滿に調和したる生命なり。——永劫種の生命なり。

人類の現時の精神的生存、及び知りつゝある状態としての未完の生命は、如上の完成に對する自然の現在に於てせる預言なり、吾人は此の眞

正なる生命を、唯其の素質として所持するのみ。吾人は今吾人の永生を僅に其預言的發端として所持するのみ。一切自然の子輩たる人類は天國の空氣と其の原素とに對する幸福なる順應の域に至るまで今猶如何に遼遠なるかを回顧せよ、彼猶未だ宇宙に君臨すべく生れし所の、其の宇宙の精神的主人たるを得ざるなり。宇宙の勢力は彼を嘲笑し、其の原素は反りて彼を壓倒せり。微粒體ミクロンも能く彼をして其の元氣を失はしむ。一個の細胞も彼の身體の組織の中に能己を生かして彼を殺すを得。最微の天體の一個(地球)の唯一片の薄皮が、能く彼に隱匿所を與ふるに足り然も彼は未だ空を飛ぶの自由を得せざるなり。彼の智力は上天の弓狀の限界を越上す、然も星斗は猶彼の數へ得るよりも多數なり。彼自身の微小なる塵塊といへども、彼の科學の知る能はざる原素的秘密を潛藏す。彼は猶は其の統御せんが爲に生れたりと

と自覺する所の外界の勢力に服役せざる能はざるなり。人類の治世に於て、精神の時代は尙未だ到來せず、今僅に到來しつゝあるなり。一切の既得の技術、自然力を克服したる所の一切の科學的君臨、其の知識の一切高大なる概括は、彼の精神の本來的主權を増加せり。莫遮人は見るべき宇宙に對する其の現時の統率に於て、猶唯皇太子たるに過ぎず。猶未だ即位したる帝王に非ざるなり。彼未だ中央の寶坐に立たず、後光を放たず、見るべき宇宙未だ彼に服せざるなり。猶未だ一基督敎預言者が見たるが如き、日の中に立つ所の天使の如くあらざるなり。人類の直接的肉體の制限の下に、又此物質的創造に對する人類の現在の不完全なる關係の中に、此の如き君主職果してこれ待望し得らるべき乎。人類の精神的能力の完成が充實せられん爲に其の精神が果して己の性質に一倍恰當したる周圍に入りて、一倍自由一倍幸福なる順

應を行ふべき乎。

蓋自然に對する吾人の知識の中に、心の物質に對する關係が、猶一層精神的なるべき可能性を遮絶すべき、何等の事物あること無し。吾人は彼の詩人的哲學者ヘルデルと與に、肉體は神の地球に於ける一切の前途の終極なることを斷言し得。然れども吾人は此の地上の肉體が、唯天上に於ける或る倍善の肉體の發端にして又前表なるべきことを拒絶すべき、何等科學的推理を有せざるなり。肉體は今吾人の知る如く、新なる秩序の種子たるらしく、進化の新過程の第一級たるらしく、外部の宇宙と精神的接觸を爲すに由りて完成すべき生命に對する門戸たるらし。死は現在の肉體の素質的形體に終極を來すが故に、吾人が精神的生命に對向する肉體の過程は、既に終を告げたること、又は或る他の高尚なる發達と成果に連絡することなしと云ふことを結論するは、

科學的又合理的に是認せらるゝこと無し。最後の完成は、宇宙に對して完全に接觸するが爲に起る所の自覺的精神なるべし。創造全體は完成に對向す。自然に根據せる吾人の永劫に對する議論の積極的動量は是なり、——吾人の生命も亦完成に對向せざるべからず。

物質的周圍に對する一倍幸福なる順應に本づく所の、來生の待望、又は靈魂の永生の希望に對する科學的門戸の待望は、博物博學が屢深く感動する所の進化の光景を、吾人が回顧するとき、一層明白を加ふるに至らん。吾人は自然の過程に於て起り來る決勝點に言及す、此決勝點に於て、連續を絶つこと無く、唯物質的狀態に些少の變更を加ふるに由りて、巨大なる變化が提起せられ、自然界に於ける全體の活動の全然斬新なる連續が、更に興起せられたり。進化は、精力としては繼續的なり、然れども其の結果に於ては平等なること無し。危機は、卒然新性質顯

はれ、一大變化の行はるゝに當りて起り來る。自然的進化に於ける此如き決勝的變化は、今顯はれ得るよりは一倍濶大なる生命の可能性を示すべき實例として引用せらる。種々なる溫度に於ける一滴の水の歴史の中に起る所の状態の變化と新性質の領取とは屢引用され、尙且驚異せらるゝ所の實例ならずや。自然は常に見ることを得ざるも、既往にも思料する能はず、今日殆ど信すること能はざる所の驚異すべき變化を示す。勢力保存の法則は亦吾人の生命に顯著なる變化を拒絶せず、反つて之を可能ならしむ。靈魂對肉體の關係及び人格的存在と其の固有の個體とが其の肉體の分子的物質に依頼すること、此等は極めて輕微に且容易に變化したる關係にして、何等固執的、不可分解的の束縛に非ず。此の關係は其の胚芽的發端に於ては、一切微細なる物質の唯一個點内に包含せられ、其の一個點に由りて、惹き起こさる。世々

繼續せる生理的關係は、原形質的物質の單一絲なりとす。此の一絲は顯微鏡に由りて見るべからざらば、微小なる物なり。生物學の闡明し得る所の一事、——其の闡明は恐くは人をして震慄せしむべし——は、心は其の出産し、到來し又之を遺傳する爲に、身體の全部、完備せる腦髓完成せる感官、又は一個の神經をだも要せず。卵中の染色素質の唯至細なる數絲にして足る。物質界に於ける人格的個性の依頼する元質は其の原始に於ては此の如き至小容積に還元せらる。然れども死は出生と均しく決勝點なりとす。——繼續せる生命史に於ける他の危機なりとす。世界に出生するに就き極めて寡少なる吾人の知識は、世界より去る所の死を、宇宙に對する他の倍大なる關係に生るゝ新生に非ずと言ふことを、吾人に許證する物ある無し。人格的生命が物質に對して有する關係の輕微なるを知らば、吾人をして肉體を瓦解

するは必ずしも外界の宇宙に對する個體の關係を破壊するに非ずと云ふことを是認せしむ。出生の際、又死亡の際に於て、肉體の靈魂に亘る橋梁は世界の基よりして架けられたり。唯其の兩者の場合に於て、其の吾人の感官に顯はれざるのみ。生物學は生前死後に於ける生命と、其の過渡を否定すべき何等の知識を有すること無し。生物學は明々靈魂の前途を存置せり。事物斯の如くなるが故に、吾人が正に自然の完成の生命的大原則より舉證したる所の積極的推論は、生物學中に地歩を占領し、自由に永生の希望を享樂するを得るなり。吾が詩人ホイッチャアは——此の自然の大真理の土底に於て、其の永劫の善に於ける美妙なる信仰を植之附け、其の信仰に基いて其の富麗なる生命の秋の歌を詠し出せり。

是に於て現在の感謝は  
未來の善を確證す、  
今見る所の事物の故に、  
來るべき事物に信賴す。

永劫の有らふる時間を、  
祭日として我は守らん。  
來るべき善に追ひ及しき  
然して勝利を分ち享くべし。

我は地球の向上を感ず、  
我は大進軍の前進を喜ぶ、

かくて生涯信仰に由り、  
吾が感謝の特權を享樂せん。

美妙なる信仰の由つて興る所の此の自然に對する信賴の上に、生命の他の一大勝利的原則は、尙其の預言的待望の明白なる言語を加ふ。吾人は種よりも、寧個性に對して多大の尊敬を加ふる所の自然の性情に懇ふ。讀者宜しく吾人か遼遠なる發端よりして、追跡し來りし所の個性の過程を憶ひ起すべし。吾人は個性が、自然の目的の一なることを見たり。有機的進化の最後の言語は、個體と其價值となり。是故に個體的人格の完成の觀念は、進化の完成に於ける一切科學的觀念の中に包含せらる。個體的人格の完成は、科學的に思料し得る所の生命の成就の眼目なりとす。蓋は若個性の取得せられたるは、唯之を失亡せん

が爲なりとせば、若人格が不幸にして死滅し、唯種のみ生存し、人類たる生命のみ繼續せば、生命は其の首要なる線路に於て、完成に導かるゝこと無く、忽ち停止して其の進歩的、主宰的原則の一たることを失はんのみ。最も肝要にして尙且普通に看過せられし事實、即ち進化の向上するに隨ひて、生命に於ける個體の利害愈大なりと云ふ事實、又は同等の眞理的價值を以て提出せらるべきが如く、個體に於ける生命の利害愈大なりと云ふ事實は、最上の解釋的價值を有して、吾人の將來の進路に無量の光を投射すべき物なり。個體は人に至つて絶頂に達せり。人の人格は自然の最上事實として天に對立す。人なる個體は既得の生存的價值を有す、進化の階級を降等するに隨ひ、個體は種の犠牲となり、之を昇等するに隨ひ、種は個體の爲に存す。人格的永生は今日以降自然の思料すべき最上事項なり。自然界の最善は來らんとする生命に

對する自然の保證是なり。是故に完成の原則に於ける信頼に加ふるに、自然の可能的最善は永劫的價值を所持せる個體なりと云ふこと、及び宇宙の外面に對する倍善の順應に由りて來る所の、人格的生命の繼續に對する本來的増加が、圓滿且鮮明となると云ふ考慮を以てすべし。遼遠なる過去世界より來り、又未完の現在世界より來れる生命の約束を、自然は未知の未來までも維持し行くべし。是故に吾人の人的心情は生命に對する飢渴に由りて、自ら自個自身の真正なる預言者となり得る。而して吾人の至上の人的生命は、自個自身の確實なる解釋家となる。吾人は吾人の生命に基いて、吾人の詩歌を得ざるべからず。吾人の然かく深く知了する所の自個の不完全、然かく沈痛なる人の生命と愛との奇異なる斷絶、吾人の思想感情の、自個の人格的生命に對する絶對不可解等、大凡吾人が今日最も眞實にして又最も高價なる取得

と算する所の、一切現在に於ける此等の不満足こそ、來らんとする所の生命の一大報告として、絶へず生命の豊富と明白とを加へつゝあるなれ、若一切未完の生命の聲と其の説話との中に、自然の深甚の眞理を聴くべき耳を吾人にして有したらば。

進化の向上的默示全體の宣言する所の、善行に於ける自然の維持的能力は、人類の時代に於て、其の吾人を誤るが如きことあるべからず。此の有力なる原則は、吾人の人的希望の把握の中に在つて、其自身傷める輩に非ざることを自證せり。其の生命の言を維持して、此の地球上に人類の到來するまでに至れる所の此の能力は、最後に於て卒然たる不信實を以て、吾人の人的心情に對して其の信義を破ること無からん。知るべき心は、一刹那の流眇の後、忽ち湮沒に投せられんが爲に、喚起せられたる物には非ず。人の心情は單に其の破綻せられんが爲に遣ら

れたるに非ず。世界自身の飢渴に基づく所の科學的預言の原則は、然して生命の歴史に眞實なることを自證せり。而して其の原則が、活ける神に對する人類の精神の飢渴の上に眞實なるが故に、吾人は其の原則が最後に於て吾人の最大本質的生命、永生的要望に於て吾人を欺くべしと想像する何等の理由を有する無し。最初には殘酷に見ゆる、不斷懇求し熱望する所の飢渴——莫遮生命が之に由りて高く誘き上げらるゝ所の飢渴——其の飢渴は其自身、人の靈魂に由りて變化、變形せられて、最後には福祉を以て冠せられたり、飢渴きて義を慕ふ者は福なり、其人は飽くことを得べければなり。此の進化と歴史との最高峰の上に、吾人は人類が人の子に由りて變貌せられ、受領せられ、榮光を受けたるを見る。生命は其自身、父を識るに由りて其の圓滿なる自個啓示を遂ぐるに至れり。「彼」に由りて生命と永劫——究竟永生——を得る

ことは明白となれり。蓋は古の弟子は「彼」に就て語り、至高者に於て生命の完成すべき自然の預言を意識して、彼に就て次の如く發言したるなり。彼は復死を見ことあるべからず、爾は爾の聖者を朽ちしめたまふまじ「徒二〇二四、十八〇三五」。

茲に又此の完成の原則に關する他の超勝なる事業あり。是は此の問題に關する一切の文學中に、殆ど注意せられずして存する物、而も實は人の永生に對する自然自身の進化的舉證の中に彰明較著に存する物なり。其物は即ち生くべき意志は進化の最上所得なりと云ふこと、生くべき人の意志は其の將來の進化の原動力と算入すべしと云ふことは是なり。生くべき意志は進化の産物なり。然れども其の一たび明白に意識的に人の生命中に握取せられしや否、意志は特別なる原動力として進化の行程に入り來り、爾來其の可能的行動と結果とは、將來の一



切科學的預備として考ふべきものなり。吾人は此生くべき意志を、動物生存の最初の活動の中に追跡するを得。此の意志は生命の最初の運動、原始の衝動、自然的本能なり。此の生くべき意志は生長して勇氣を聚中し遂に高等動物に於て主宰力と成り、筋肉と感官、襲撃と遁走、本能と睿知の一切發達したる能力を己に服役せしむ。此の生くべき意志は人に在つては明白なる精神的火焰と爲り、此の以外なる一切物を此の中に焚き盡し、遂には其の精神自身も亦永久銷盡したるやう見ゆ。(譯註死を謂ふ)。然れども然く精神的なる火焰如何して銷盡し得べき乎。

茲に注意すべき事は、生くべき意志は單に敵對力と破壞力とを抗拒するのみならず、亦建設力順應力の特徵を示し、之に由りて此の意志自ら己の使用の爲に、新なる條件を製し、己の爲に一倍恰當なる周圍を造る

ことなり。人の生くべき強猛なる意志は、生理的周圍の上に顯はれ來る顯著なる反動に由りて、其の自個維持の精力を増進す。醫師は實に此の精力に援應を得、疾病は未定の間に此の精力に由りて保持せらる。是は亦往々死を延すべき能力を有せるが如く見ゆ。且是は其の高等なる精神的精力を受難すべき、奮闘すべき、思想すべき、研究すべき、得べき、愛すべき能力として顯現し、斷じて時の注意、死の恐怖を感ずることなし。此の不死の意志は、自然力の中に一勢力にして、來世に對して吾が哲學の中に夢想せしよりも、一倍現實なる意味を有する物なり。此の意志は往々垂死の際に於て、最も赫灼に射出し、最も勝利的なるを見る。若思想ある尊貴なる人の、此の生くべき強猛なる不死の意志が、單に自證的勢力たるのみならず、更に生活の他の條件と要素とを己に順應せしむる能力を有する所の生命の創造的精力ならば、縱令其が此の

必死の肉體をして死去せしむるにもせよ、其の明白なる永劫性が、人の内に在る所の精神の可能的取得たり、神の恩賜たるを得るなり。若人の中なる順應的又建設的なる此の生くべき意志が、茲處まで進歩し來れる進化の最後にして又最高なる結果なりせば、恐くは他の倍善の境遇に於ける其の繼續と自個維持とは、必ずしも不可信的の事物に非らじ、寧是は生くべき意志の本性的完成と謂ふべし。吾人が科學的に充實せられんことを待望する物は、此の意志の自然的完成にこそあるなれ。恰も進化に於ける一切の他の精力が、其の全力を盡さんことを吾人の待望するが如く。

死の恐怖をも壓倒する所の生くべき意志は、人的歴史の至上靈魂に由りて、其の最も有力なる徳義を證示せり。此の意志はソクラテスに由りて死の輕蔑を宣言せり。此の意志は有らふる殉教者の勝利に由り

て發照し、英雄の歡呼に由りて響轟し、聖徒の顔面に顯現せり。彼等は單に受動的斷念に出で、死に降りしに非ず、永生の約束に敬禮すべき精神的信仰の作興に由りて死に趣きしなり。彼等は死に由りて死を己の用に供しき。意志の最高能力を有せる人倫の意識に於て、恰も耶穌の内にあるが如き心の内には、生命の精神的意志が不斷、豊富、不可克なりき。人の子は恒に、其の友に向ひ、恰も吾人の一が、一切世間的趣意に就いて言ひ得る如く、自然に、何等の疑念無くして曰ひき、我生く——蓋は父己に生命を有てる如く、我にも與へて已に生命を有たせたり。

——我父に往く、——我再び來らん、——然れども我汝等に至る、——我吾が父即ち汝等の父吾が神即ち汝等の神に昇る」と是に於て「神の子」としての生くべき意志、其自身に於て不可克、神聖なる意志は、死を克服して腐敗に繋がるゝこと無し。

茲に又人格に對する生命の自然的向上と、生命の完成に關する其の預言とを示す、他の一状態あり。此は一切未完の自然より來る證據の中に暗示されたる物にして、吾人の一言無くして看過すべき物に非ず。吾人は既に顯然たる人格を以て終極する所の自然界の個成の過程は、個體を世界の外に離隔する物に非ざること、人格は寧外なる宇宙に對して自個意識を以てせる完全なる順應なることを觀たり。人格は吾人の既に説きたるが如く、全然自個自在の物として考ふべからず、自個の周圍の一切に對する關係に於て存する物なり。是は勿論自然以上に超出す、然れども自個之が一部分たる所の創造の大全體の外に出づること無し。是は宇宙に對して意識的惟一を成せる所の生命なり、世界的家族の一成員たる生命なり。「父」の家に於ける「僕」としてには非ず、其の「子」として自個の周圍の一切に屬せりてふ幸福なる感覺を有す

る所の生命なり。人格は其自身に於て一個孤立せる感覺の一點よりも勝れり、人格は社會的成就にして、又永生の所有を得たる物なり。人格は廣く且高く星界を觀望し、其の満足なる基督信者の自個意識を以て自個自由の爲に詠歌し得。——一切萬物は汝等の有なり。人倫的朋友も、若くは世界も、若くは生も若くは死も、若くは今在る物も、若くは後在らん物も、一切是れ汝等の有なり。汝等は基督の有にして、基督は又神の有なり。(哥前三〇二二)

是故に不死の豫言は吾人が之を個性の進化から讀み得る限は、又社會的不死の約束なり。此の不死的生命の種類は、吾人が今日豫め其の價値と喜樂に進入せる如く、精神の交際なり。吾人は此の精神の交際を他——生者及び死者——と之を分つが故に、之に入り又之を有す。宇宙生命に對する交際に由りてのみ、吾人の個性は圓滿に玉成せらる。

吾人は「父」と「子」と同心なることに由りて、生命を得んが爲に、吾人の自個生命を失ふを甘んず。實在生命なる所の生命は、神又人と同心なる事なり。同心なることは生命の最終、最大、而して不死の言なり。

是故に個體生命の將來の連續に關して、科學的假定を提起する所の如上の完成の原則は更に基督教の信仰、即ち、個體生命が外部の創造物と完全なる接觸を成し、同類的精神の交際に由りて、無上の満足を感じる生命たるべしてふ信仰を是認す。約言すれば人格的不死は其の完成條件として、必ずや社會的不死を包含す。世界の光として圓滿に自己を啓示する所の生命を有せるの人は、暫時にして物質的肖像若くは表面的絢爛に由らず、親密なる人格的關係、及び友情の數言に由りて、其の完成を記録す、曰く汝等再び我を見るべし、我と汝等と吾人と一切一切全くせらるべし、此の如きは是れ「子」の元始より「父」と與に有らし所、又一切

が一と爲らん爲に、弟子が「子」と與に有つべきやう彼の祈りし所の光榮の中に成立すべき、人的生命の社會的完成なり。

此の社會的不死の希望を、基督教の他の定説を以て追求することは、吾人をして自然の現在の所得と預言に基く所の永生の議論の限界を超越せしむ。然れども自然神學が僅に吾人を天國の玄關に導くに止まる間は、自然神學は吾人を戸扉の前に遺棄して、天上の默示を待たしむ。吾人は猶未だ此の倍大の世界に生れずといへども、自然は其の自由を現實せんが爲に吾人を造りて之を養育す。今日猶自然の子宮に腹まられたるに過ぎざる人類の生命も、其の内に未知の能力の發動を感じ、其の不死的價値の胚芽的意識を示せり。先に自然的なる物在り、次に——其の確實的成就である——精神的なる物在り。如何なる事物が吾人の再び生るべき或る廓大、高明なる世界に於て、吾人の爲に準備せら

れし乎。吾人の精神的生命は如何に自然と或る優美なる調和を保つことに由りて大成せらるべき乎。——此等の事物は人の心未だ思ふ能はざる所にして是は復活に由りて生命の頌榮を得べしと云ふ、基督教的希望に外ならず。吾人は其の希望の如何なる物なるべき乎を知らず。然れども其の希望が自然の法則と預言とを成實すべきこと、同時に其の一切此等の物に超越すべき物なることは吾人の知る所なり。茲に彼の最大使徒の羅馬人に與ふる書翰の中に、驚異すべき聖句之あり。此の聖句の中に、到底其の時代の一切の文學又は哲學より發ることには能はず、獨創造物の精神的惟一と希望とに關する斬新なる基督教的概念を立證する所の言語あり。吾人は吾が近世の學術よりして、之に斬新の意味を加へ、之を一切所論の總括として引用す。精言すれば、吾人が、自然の起源、其の生存競争、其の増加的生命價值、永生の爲に死の

入來したると、人格と人の子の光榮の到來の準備に就ける科學的研究に由りて、乃至其の未完の生命の預言的指摘に由りて、學び得る所の對自然の最高解釋の總括として之を引用す。吾人は實に一世紀の科學の絶頂に於て、聖徒パウロが光耀的意義を以て、其の言語に充たさんと夢想し得たるより、數等豊富なる進化的智識を以て、心胸を開いて告向するを得。蓋は所造物の切なる望は、神の子輩の顯はるゝを俟てばなり。蓋所造物の空に歸するは、其の願ふ所に非ず、唯之を歸する者に賴る、所造物自ら敗壞の奴たることを脱かれ、以て神の子輩の榮光なる自由に入らんことを望んでなり。(羅八〇二十一—二十二)

## 科學的信仰大尾

明治四十一年九月十五日印刷  
明治四十一年九月十五日發行

著作  
所有

定價金七十錢

譯者 宮崎八百吉

發行者 東京市京橋區尾張町三丁目十五番地 福永文之助

印刷者 橫濱市本町五丁目八十七番地 村岡平吉

發行所 東京市京橋區尾張町三丁目十五番地 警醒社書店

印刷所 電話新橋一五八七 振替貯金口座三三番 東京市山下町八十一番地 福音印刷合資會社

宮崎湖處子君譯

アウチンガ 懺悔錄

上製定價八十五錢  
並製定價七十五錢  
郵稅各八錢

肉慾の甘樂、罪惡の苦悶、人生の哀別、離苦、花鳴呼是れ血あり肉あり良心ある代表  
的偉人の懺悔錄なり、明確不磨の寫眞鏡なるを知れ、

大泣哭、而して後、聖徒的獨身、信者不信者之を讀んで其の自個

宮崎湖處子君譯

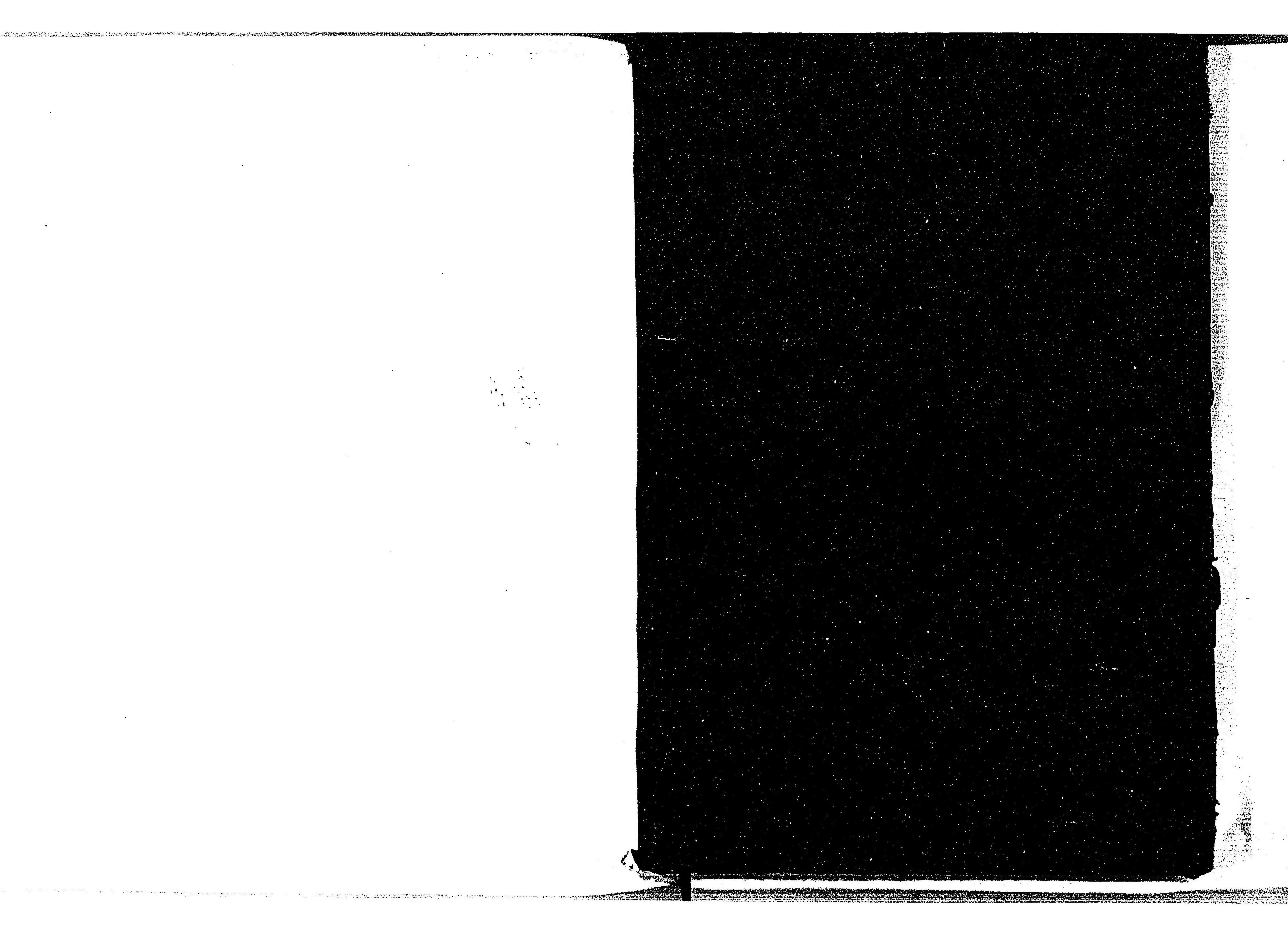
新約私羅馬書

定價二十二錢  
郵稅二錢

此書の原書は獨乙の聖書協會の出版に係る最も新にして又最も古き希臘文原書なり  
目下聖書改譯は基督敎界の希望にして彼原書を以て有名なる羅馬文原書如き  
に其必要に逼れり是れ之の私譯の十年一掃此原書を以て最名なる羅馬文原書如き  
啓導を感じ聖書研究に從ふこと十年一掃此原書を以て最名なる羅馬文原書如き  
を此書に著し盡く從來の晦澁不瞭を一掃し前人未發の微妙を撰別し出し新舊譯  
を異にせる主なる聖句の對照は隱微なる羅馬書の宗敎意識を撰別し出し新舊譯  
るパウロの死生觀を論述せる羅馬書見の一篇を以てせり

17  
343





013556-000-1

17-343

科学的信仰

ニューマン・スミス/著

M41

ABA-0018

